

スポーツ活動におけるパワーハラスメント問題からみる 指導者と選手の関係

—— A大学アメリカンフットボール部「反則タックル問題」を事例に ——

神戸松蔭女子学院大学 長谷川 誠

抄 録

本稿の目的は、スポーツ活動におけるパワハラ問題の背景にある事柄について、指導者と選手の関係性の視点から、事例検討を通して整理し、今後の研究の一助にすることである。検討の結果、本事業案においては、厚生労働省が示すパワハラ6類型に該当するおそれがある行動がみられた。しかし、指導者にはその認識がなく、一方、選手側も、今回の一連の行動は自身の甘さが大きな原因であり、周囲の選手を含め指導者の指示を盲目的に従ってきた自分たちに責任があると認識していた。こうした背景には、チームの統治が指導者を家長とした日本の伝統的な家の概念が強く根付いた中で、様々な意思決定と伝達が行われていることが通常化していることや、選手自身のキャリア形成や競技実績の向上というプロセスを経ることにより、選手は指導者を権威的な存在だと捉え、絶対的な主従関係が形成されることにより、たとえ理不尽な指示であっても自発的に従う心理が働いていることがあると指摘している。

Key Words：スポーツ 主従関係 権力 権威

1. はじめに

2018年はスポーツにおける暴力、暴言などのパワーハラスメント（以下、パワハラ）に注目が集まった年であった。連日、メディア等を通して、国を代表するトップアスリートや団体、各種において名門といわれる大学内部からのパワハラに関する告発が発信されたことは、国民に大きな衝撃を与え、国民の意識の中で、スポーツ活動におけるパワハラへの関心は、絶えず高い状況が続いたのである。

このパワハラについて厚生労働省は2012年にまとめた「職場のパワーハラスメントの予防・解決に向けた提言」¹の中で「同じ職場で

働く者に対して、職務上の地位や人間関係などの職場内の優位性を背景に、業務の適正な範囲を超えて、精神的・身体的苦痛を与える又は職場環境を悪化させる行為」と定義している。そして、パワーハラスメントの6類型として、①暴行・障害（身体的な攻撃）、②脅迫・名誉棄損・侮辱・ひどい暴言（精神的な攻撃）、③隔離・仲間外し・無視（人間関係からの切り離し）、④業務上明らかに不要なことや遂行不可能なことの強制・仕事の妨害（過大な要求）、⑤業務上の合理性なく、能力や経験とかけ離れた程度の低い仕事を命じることや仕事を与えないこと（過小な要求）、⑥私的なことに過度に立ち入ること（個の侵害）、と整理した。

また、文部科学省は2014年に「スポーツ指導における暴力等に関する処分基準ガイドライン（試案）」の中でスポーツにおけるパワーハラスメントについて「同じ組織（競技団体、チーム等）で競技活動をする者に対して、職務上の地位や人間関係などの組織内の優位性を背景に、指導の適正な範囲を超えて、精神的若しくは身体的な苦痛を与え、又はその競技活動の環境を悪化させる行為・言動等をいう」と定義している²。こうした動きには、2012年の大阪市立桜宮高校や全日本女子柔道チームにおいて、指導者による選手への暴力、暴言等の悪質な体罰事案が影響しており、これらをうけて、公益財団法人日本スポーツ協会は2013年「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」の中で次のように示している³。

- 指導者は、スポーツが人間にとって貴重な文化であることを認識するとともに、暴力行為がスポーツの価値と相反し、人権の侵害であり、全ての人々の基本的権利であるスポーツを行う機会自体を奪うことを自覚する。
- 指導者は、暴力行為による強制と服従では、優れた競技者や強いチームの育成が図れないことを認識し、暴力行為が指導における必要悪という誤った考えを捨て去る。
- 指導者は、スポーツを行う者のニーズや資質を考慮し、スポーツを行う者自らが考え、判断することのできる能力の育成に努力し、信頼関係の下、常にスポーツを行う者とのコミュニケーションを図ることに努める。
- 指導者は、スポーツを行う者の競技力向上のみならず、全人的な発育・発達を支え、21世紀におけるスポーツの使命を担う、フェアプレーの精神を備えたスポーツパーソンの育成に努める。

以上のように、スポーツ活動にかかわらず、労働、経済活動など社会全体でパワーハラ根絶に向けた取り組みが多くなされているにもかかわらず、依然として、スポーツ活動における暴力、暴言等のパワーハラ問題が後を絶たないのはなぜだろうか。望月浩一郎（2013）は、大阪市立桜宮高校事案、全日本女子柔道チーム事案後でも、暴力行為を容認する意見が、指導者のみならず保護者にも根強くあるとし、その背景には「勝利至上主義」、過度な「競技志向」があると述べている⁴。また、渡辺雅之（2014）は、日本のスポーツ界の体罰体質について、体罰の起源が軍隊にあり、暴力的な軍隊文化の中で、選手は指導者の指示に盲従する傾向があると論じ⁵、日本のスポーツ文化には、指導者と選手の関係性の中に体罰容認の意識が根強く残っていることを指摘する。つまり、日本のスポーツ界には、暴力や暴言等のパワーハラを容認する文化や意識が、指導者、選手双方にあることは、これまでの研究でも明らかになっており、パワーハラ問題においても重要な視点であるといえる。

本稿では、このようなスポーツ活動におけるパワーハラ問題の背景にある事柄について、指導者と選手の関係性の視点から、事例検討を通して整理し、今後の研究の一助にすることを目的とする。

2. 先行研究の検討

日本のスポーツ活動において暴力や暴言等のパワーハラが絶えない要因には、指導者、選手間で強い主従関係が形成されていることがある。この点について野崎武司・植村典昭（1993）は、日本におけるスポーツ集団の特徴のひとつに、日本社会に根付いてきた「家制度」があると述べている。そしてこの「家」の概念について「家長によって統率される統治体を意味することが明白である。家長は家の維持繁栄の責任

を担う中心的存在であり、家族はその恩情と専制を引き受ける」存在であるとする。戦後、この家制度は解体されるわけだが、この「家」の論理が、様々な統合体、経営体に引き継がれることとなり、スポーツ集団においても、このような文化が生き続けていると論じている⁶。そして、阿江美恵子（2000）は、こうした性質を持った競技スポーツが学校教育の場で発展したことで指導者の権威がより一層大きくなったと指摘し⁷、日高哲朗（2010）は、指導者にとっての暴力的な指導は、体力や技術を高めるための効率的な指導法となってしまう、強制力をもつ有効な指導手段と認識することについて、勝利という目的追求行為を理由に暴力を正当化しているため、道徳的な判断は停止状態になってしまうことを要因にあげている。また、スポーツ活動の場が閉鎖的な空間で行われることにより、スポーツ特有の論理が支配し、その空間を支配するスポーツ指導者は権力を持ち、まさに権威となり、それを独占すると指摘する⁸。

他方、学校スポーツにおいて、このような関係性を成立させる要因には、スポーツ推薦制度の影響がある。この点について浜田寿美男（2014）は、スポーツ推薦が一般化するなかで、「競技結果が教員の評価のみならず、生徒や保護者にとって大きな意味をもつし、同時に指導者に従順であることで自らの評価を高く認めてもらうことも重要になってくる。そうした状況があるからこそ、部活のチームとしての（閉鎖性）が求められ、成員間の指導（支配）－服従の絶対的關係が強化させることになる」と論じている⁹。そして、西山哲（2014）また、大学入試制度における各種推薦入試では、競技成績や主将や裏方としてクラブを支えてきた実績も評価の対象となり、こうした実績を推薦書に記載するのは部活動の顧問であり、それがスポーツ指導者の権力拡大につながっていると指摘す

る¹⁰。

つまり、スポーツ活動における指導者と選手の関係には、日本文化の「家」の概念が根強く残り、その組織の統治の仕組みとして強く影響を及ぼしている。そして、学校スポーツでは、閉鎖的な空間であるといった特徴がある中、暴力、暴言を介した指導が技術を高める効率的な指導法として、一部において根付き、加えて、スポーツ推薦制度という選手の自身のキャリアを左右する大きな権力や権威を持つことによって、指導者と選手の間には絶対的服従の関係が成立することになるのである。しかしながら、確かに、自身のキャリア形成に影響を及ぼす指導者の存在は、選手にとっても大きいこととはいえ、第三者の立場からみて理不尽とも思える事柄を無抵抗に受け入れる心理を説明することは難しい。また、こうした主従関係においては、選手にとって指導者が持つ権力や権威が絶対的なものとなっていることは確認できるものの、冒頭で指摘したように、選手の側においても、こうした主従関係を受容する意識があるならば、その意識を形成している事柄を探ることが、スポーツ活動におけるパワハラ問題の深層に近づく意味でも非常に重要であると考えられる。

そこで、次節では、2018年5月に発生したA大学アメリカンフットボール部「反則タックル問題」を報じた新聞記事における選手の発言に注目し、スポーツ活動のパワハラ問題における指導者と選手の関係性について検討を進めてみたい。なお、本稿は、本事例における事実関係に言及するものではないことを付言しておく。

3. 事例検討 – A大学アメリカンフットボール部の「反則タックル問題」 –

3-1 本事案の概要

2018年5月6日、関東地域にて実施されたA大学とZ大学との間で毎年実施される定期戦において、A大学の選手AがZ大学アメフト部のクォーターバック（以下、「QB」）の選手に対して、ルールを逸脱した極めて危険な反則タックルやラフプレーを繰り返し起こし、退場処分を受けることとなった。これにより、Z大学のQBは負傷し、約1ヶ月の療養が必要となった。負傷したQBについては幸い大事には至らなかったものの、選手生命のみならず場合によっては日常生活を送ることが困難になる可能性もある事案であった。事態を重くみたZ大学の監督は、一連の行動についてA大学に対して説明を求めることとなったが、A大学監督及びコーチからの説明や対応等に対する世論の関心が高まり、マスコミ各社の報道も過熱することとなった。こうした中で、2018年5月22日に選手Aの記者会見が行われ、本事案の経緯と選手A自身の想いや考えを述べたのである。

3-2 新聞報道の内容と検討

ここでは記者会見の翌日以降に新聞報道された内容を基に検討を進めてみたい。なお、以下の新聞記事内において実名で記述されている箇所、個人名および個人や団体が特定される可能性がある記述においては、筆者側で次のように別表記に書き換えている。当該選手は選手Aとし、A大学アメリカンフットボール部監督及びコーチも実名で記載されていたが、本稿では監督、コーチとした。

(1) 選手Aのコメント

(中日新聞朝刊2018年5月23日)

1) 5月3日

5月3日の実戦形式の練習でプレーが悪かったということでコーチから練習を外されました。これまで同じようなことはありませんでしたが、このころは、監督、コーチから「やる気が足りない。闘志が足りない」という指摘を受けるようになっていたので、このプレーをきっかけに外されたのだと思います。その後全体のハドル（円陣）の中で監督から、「選手Aなんかはやる気があるのかないかわからないので、そういう奴は試合に出さない。辞めていい」。コーチからは「お前が変わらない限り、練習にも試合にも出さない」と言われました。

2) 5月4日

練習前に監督から「日本代表に行っちゃダメだよ」と、当時選抜されていた今年6月に中国で開催される第3回アメリカンフットボール大学世界選手権大会の日本代表を辞退するように言われました。監督に理由を確認することはとてもできず、「わかりました」と答えました。この日は今年度初めて全体で行うディフェンスインディー（守備練習）の日でした。未経験の1年生がいたので、副キャプテンがタックルをして私が受けるかたちでメニューをやってみせるために私がダミーを持ちました。すると、コーチから「なぜ最初にダミーを持つんだ」と言われてグラウンド10周走られました。その日の実戦練習は、練習前にコーチに確認したところ「選手Aは出さな

い」と言われて外されました。

5月3日、4日は、問題の反則タックル事案の直前練習、つまり、試合のメンバーを中心に練習をする期間であるにもかかわらず、練習から外されたことは、日本代表に選抜されるほどの高い技術を持っている選手Aにとって精神的に辛い出来事だったことは容易に想像できる。また、その日本代表を辞退するように言われたことも同様である。しかし、その理由を監督に直接確認することもできず、その指示を受け入れられなかったことから、監督が絶対的な立場にあることがうかがえる。そして、コーチも監督同様、選手Aの練習参加を認めず、グラウンド10周という別メニューを課し、選手Aもその指示に従っている。つまり、コーチも監督との主従関係にあり、コーチの言葉（指示）は、すなわち、監督の言葉（指示）である、といった意思決定の仕組みが構築されていたことがみてとれる。

3) 5月5日

この日も実戦練習は外されました。練習後、コーチから「監督に、お前をどうしたら試合に出せるか聞いたら、相手のQBを1プレー目で潰せば出してやると言われた。『QBを潰しに行くんで僕を使ってください』と監督に言いに行け」と言われました。続けてコーチから「相手のQBと知り合いなのか」「Z大学との定期戦がなくなってもいいだろう」「相手のQBがけがをして秋の試合に出られなかったらこっちの得だろう」「これは本当にやらなくてはいけないぞ」と念を押され、髪形を坊主にしてこいと指示されました。ポジションの先輩から、コーチに「選手Aに『アライン（プレー開始前に立つ位置）はどこでもい

いから、1プレー目からQBを潰せ』と言っとけ」と言われた旨を告げられました。相手を潰すくらいの強い気持ちでやってこいという意味ではなく、本当にやらなくてはいけないのだと追い詰められて悩みました。

試合前日になっても依然として試合出場の目途がたっていない中で、コーチは、監督が翌日の試合でZ大学QBに対して強いタックルをすることを試合に出場するための条件としていることを選手Aに伝えている。そして、コーチは選手Aに対してZ大学のQBに強いタックルをするのは、秋の試合でA大学が優位に立つためにも必要なことだと説明し、髪型も坊主にするよう指示をしている。さらに、コーチは先輩を介して同様の指示をしており、選手Aは監督、コーチのみならず、先輩からも告げられたことで精神的に追い詰められることとなったのである。

4) 5月6日（本件当日）

いろいろ悩みましたが、これからのA大学でのフットボールにおいてここでやらなければ後がないと思って試合会場に向かいました。試合のメンバー表に私の名前はありませんでした。その後の試合前のポジション練習時にコーチに確認したところ、「今行ってこい」と言われたので、私は、監督に対して直接「相手のQBを潰しに行くんで使ってください」と伝えました。監督からは「やらなきゃ意味ないよ」と言われました。戻った私は、コーチに、監督と話をしたこと、監督から「やらなきゃ意味ないよ」と言われたことを伝え、さらに、コーチに対して「リード＝ディフェンスライン（DL）の本来のプレーのこと＝をしないで

QBに突っ込みますよ」と確認しました。コーチからは「思い切りいってこい」と言われました。このことは、同じポジションの人間は聞いていたと思います。その後、試合前の整列の時に、コーチが近づいてきて「できませんでしたじゃ、すまされないぞ。わかってるな」と念を押されました。

試合当日、選手Aは、今後、A大学でアメリカンフットボールを続けるためには、監督の指示に従うしかないと思い、監督に実行する旨を伝えることとなった。そして監督やコーチから念押しをされたことによって、覚悟を決めている。ここで注目すべきことは、様々な報道を通じて専門家が解説していたように、アメリカンフットボールは攻撃、守備にかかわらず緻密な戦略とシステムの構築が求められており、システム上、本来すべき役割を無視して、相手QBに突っ込むことは考えられないとされていることである。つまり、選手Aが実行したプレーは、当然、監督やコーチ、選手Aが、スポーツを逸脱した行動であると認識していたことは明らかといえる。結果、選手Aの一連のプレーは、危険な反則タックルと判定され、選手Aは退場することとなったのである。

試合後、スタメンと4年生が集められたハドルの時に、監督から「こいつのは自分がやらせた。こいつが成長してくれるんならそれでいい。相手のことを考える必要はない」という話がありました。その後、着替えて全員が集まるハドルでも、監督から「周りに聞かれたら、俺がやらせたんだと言え」という話がありました。コーチからは、私が退場になった後、DLの上級生リーダーが、私に相手QBにけがさせる役割をさせたことを済まなく思っ、「自分にもやらせてほしい」と申し出たという話を紹

介して、「上級生リーダーは自分にもやらせてくれと言ったぞ。お前にそれが言えるのか」「お前のそういうところが足りないとやっているんだ」と言われ、退場後に泣いていたことについても「優しすぎるところがダメなんだ。相手に悪いと思ったんやろ」と責められました。さらに気持ちを追い詰められました。

試合後、監督は選手Aに反則タックルをさせたのは、監督自身であることや、それは選手Aが成長するために必要だったことだと他の選手に説明している。また、コーチからは、選手Aが退場になった後に、同じポジションの上級生が、選手Aに反則タックルをさせたことを申し訳なく思い、自身にもさせてほしいと申し出たことを賛美し、そうした思いを持つことが必要だと、選手Aに対して述べている。選手Aは、こうした周囲の状況と、自身が抱く相手への申し訳なさや事の重大性に押しつぶされそうになり、さらに精神的に追い詰められることとなったのである。

本件は、たとえ監督やコーチに指示されたとしても、私自身が「やらない」という判断をできずに、指示に従って反則行為をしてしまったことが原因であり、その結果、相手選手に卑劣な行為でけがを負わせてしまったことについて、退場になった後から今まで、思い悩み、反省してきました。そして、事実を明らかにすることが、償いの第一歩だとして決意して、この陳述書を書きました。相手選手、そのご家族、Z大学アメリカンフットボール部はもちろん、私の行為によって大きなご迷惑をお掛けした関係者の皆様に、改めて深くおわび申し上げます。

試合後、この反則タックル問題が社会的に大きな関心ごとになり、選手Aは事実を明らかにすることが償いの第一歩だと考え、世間が注目する中、記者会見を実施した。そこでは、例えば監督やコーチの指示だとしても、「やらない」という判断を自身で下すことができなかったことへの反省と、怪我をさせてしまったZ大学QBとご家族、Z大学アメリカンフットボール部への謝罪を述べている。そして、後述するが、自身には、今後、アメリカンフットボールには関わる資格はなく、チームに戻ることもないと述べて記者会見を終えることとなった。

(2) 一問一答

(中日新聞朝刊2018年5月23日)

次に、選手Aとマスコミ各社の記者との会話の内容をみてみたい。

記者 危険なタックルについてはどういう指示があったのか。

選手A 「コーチから伝えられたのは『つぶせ』という言葉だったと思うが、上級生の先輩を通じて『秋のZ大学との試合に相手のQB（クォーターバック）がけがをしたら、こっちの得だろう』という言葉もあり、（指示は）けがをさせる、という意味で言っているんだと僕は認識した」

記者 なぜ踏みとどまらなかったのか。

選手A 「（試合前の）一週間、（監督やコーチに）追い詰められていたので、やらないという選択肢はなかった。自分で正常な判断をすべきだった。自分の弱さだと思っている。（プレー後は）何かを考えられる状況ではなかった」

記者 監督の存在とは。

選手A 「意見を言えるような関係ではない。指示があったにしろ、やってしまったのは私。人のせいにするわけではなく、私が反省すべきだ」

記者 競技への思いは。

選手A 「高校から始めたが、とても楽しいスポーツだと熱中していた。ただ、大学に入って、厳しい環境で、徐々に気持ちが変わっていった。あまり好きではなくなってしまった」

記者 理不尽な指導はあったか。

選手A 「理不尽といえば理不尽な部分もあったかもしれないが、練習のきつさも全て含めて去年（全日本大学選手権優勝の）結果が出たと思っている。

記者 今後について

選手A 「アメリカンフットボールを続けていく権利はないと思っている。退部の意思是伝えている」

記者 どうして会見を決意したのか

選手A 「償いの一歩として真実を話さないといけないと思ってここにいる」

記者からの各問いに対しては、先ほどのコメントをあらためて述べた内容となっているが、注目すべきことは、選手Aが監督やコーチに対して批判的なコメントをしていないことである。選手Aは監督、コーチから反則タックルについて直接的な指示はなかったが、Z大学のQBが長期に離脱することを想定した指示が間接的に届いたことで、そのように認識をしたと述べている。加えて、試合当日まで監督や、コーチから様々な言葉を浴びせられ、練習に参加できないことにより、選手Aは精神的に追い込まれているが、それでも実行してしまったのは、自身の弱さが原因であり、責任は自身にあ

ると述べている。そして、選手Aがこのような考えを持つ背景には、監督からの指示は絶対的なものであり、選手側から意見することは許されないという意識があるだけでなく、理不尽だと思える事に対しても、監督、コーチの指示に従う関係性を維持することにより、前年度には全日本大学選手権で優勝し大学日本一に輝くことができたという事実があったことが、さらに主従関係を強くする要因になったと考えられる。

こうした選手Aの思考がチーム全体に浸透していたことは、選手A、監督とコーチ、双方の記者会見が終わり、A大学アメリカンフットボール部選手一同が父母会の代理人を通じて出された声明文からも読み取れる（中日新聞2018年5月30日）。

監督やコーチの指示に「盲目的に従ってきた」ことが今回の事態を招いた一因とし、（…中略…）反則をした選手は監督から追いつめられた状態だったが、「手助けすることができなかった私たちの責任はとても重い」とし、指導陣との間や選手間のコミュニケーションが十分でなかったことを反省した

まさに、他の選手たちが述べているように、今回の一連の事案は、監督やコーチの指示に「盲目的に従ってきた」ことが大きく関わっている。試合当日までに選手Aが追い込まれていたことを認識していたにもかかわらず、周囲の選手は何もできなかったことに責任を感じている他、先述したように、選手Aが反則タックルした直後に、別の選手がコーチに対して「僕にもやらせてほしい」と申し出ていることは、反則タックルという行為に対して理性的な判断ができていないことを示しており、「盲目的に」という言葉の根深さが際立つ内容であるといえ

る。それでも、選手A同様、監督やコーチを批判するコメントは見当たらない。あくまでも選手自身の弱さや指導陣とのコミュニケーションが不足していたといった内容に終始していることも、指導者と選手との関係性においては、様々な事柄、想い、思考が絡み合っていることがうかがえる。

4. 考察

本事案の内容をふまえて検討を進めてみたい。まず、本事案における監督、コーチと選手のやりとりの中では、冒頭、厚生労働省が示したパワハラ6類型に該当するおそれがある箇所がいくつか確認できる。例えば、「練習から外された」は、③隔離・仲間外し・無視（人間関係からの切り離し）。「日本代表にいつちゃだめだよ」と日本代表を辞退するよう言われたことは、⑤業務上の合理性なく、能力や経験とかけ離れた程度の低い仕事を命じることや仕事を与えないこと（過小な要求）。そして、Z大学のQBに対する明らかな反則タックルを強要することは、④業務上明らかに不要なことや遂行不可能なことの強制・仕事の妨害（過大な要求）に該当する可能性があると考えられる。一方で、当時の監督やコーチは、反則タックルの指示はしていない、あくまで選手Aを鼓舞する意味で、強い気持ちで相手選手にアタックするよう指示したのだと主張している。実際に、2018年11月に警視庁は、監督やコーチから選手Aに対して「反則タックルの指示はなかった」と判断したとの報道もなされている。そのため、本稿においては、真相が明らかになっていない中での事実や真意に迫る言及は控える必要がある。しかしながら、記者会見の場で、一人の有望な選手が、自分には競技を続行する資格はないと発言するところまで追い込まれたことは事実であり、スポーツ界全体で重く受け止めるなければならない事案であることは言うまでも

ない。

次に、本事案を通してみえてくることは、監督、コーチの指導者と選手が強い主従関係があることである。これだけ精神的に追い込まれた選手Aのコメントや他の選手からの声明文をみても、監督やコーチを直接的に批判するコメントはなく、その監督やコーチの指示を盲目的に従い、決して良くない事とわかっていながら、「やらない」「やらせない」という判断を下すことができなかった自分たち自身の弱さと責任に終始していた。このことから、指導者が持つ権力、権威に対して選手たちが絶対服従の立場であることを認識した上で、本事案に限らず、日々の練習や試合に取り組んでいたことは想像に難くない。

このように指導者が持つ権力や権威は、選手にとっては絶対的のものであるといえるが、なだいなだは(1974)は「権威も権力も、いうことをきき、きかせる原理に関係している。権威は、ほくたちに、自発的にいうことをきかせる。しかし、権力は、無理にいうことをきかせる」と述べている¹¹⁾。この権威と権力の捉え方の違いから、今回の事案を第三者的にみると、監督やコーチは権力を持って選手Aや他の選手に無理にいうことをきかせてきたと捉えることができるが、選手Aは今回の事案は、例えば指示があったとしても「やらない」という判断ができなかったことが原因であると振り返っている。その意味では、一連の行動において選手に自発性が全くなかったとはいえない側面もある。つまり、例えば結果としては間違いであったとしても、その瞬間、自発的にいうことをきいたという意識があるならば、選手は指導者に対して権威的なものを感じていたと捉えることもできる。そして、その権威的なものを感じていたことに、昨年度の大学日本一という成績を収めたことが大きく影響していることは、十分に考えられる。

また、このような主従関係を強固にする要因として、スポーツ推薦制度が影響していることは、冒頭でも触れているが、本事案においても、その一端が垣間みられる。報道によると、コーチは選手Aが高校時代、その高校で監督をしており、選手Aにとってコーチは高校の恩師にあたる。アメリカンフットボール競技の実績が評価されてA大学に進学した選手Aにとっては、監督、コーチは自身のキャリアに多大な影響を与えた人物であり、必然的に恩義を感じる事となる。つまり、大学入学段階で既に強い主従関係がつくられており、その関係性を打開することは容易ではない。そしてコーチ自身も、A大学のOBであり、監督の教え子にあたる。コーチとしてのキャリア形成においても、監督の存在が影響しており、この関係性においても強い主従関係があることもみてとれる。

こうして、A大学アメリカンフットボール部は、野崎・植村が指摘する、監督を家長とした「家制度」による統治体として、強固に作られてきたのである。その結果、2017年度には大学日本一の座を獲得するという大きな成果をあげた一方で、本事案のような大きな問題を生じさせることとなったのである。

このように、権威、権力によって選手が指導者の指示に盲目的に従う心理は、非常に複雑な関係性の中で成立していることがみえてくる。エーリッヒ・フロム(2013)は、人間は自由を大切な目的でありながら、他の人からは脅威となることや、自由をえたいという内的な欲望のほかに、服従を求める本能的な欲求があるのではないかとし、そうでなければ指導者に服従する行動が説明できないとする¹²⁾。この指摘をふまれば、選手は自由でありたいと思いながら一方で何かに頼りたいという心理を併せ持つ存在でといえる。だからこそ指導者は、こうした選手が本能的に服従する欲求を有していることを常に意識した上で、関係性を構築していく

ことが求められるのである。換言すると、指導者は、選手の行動は、自分の言葉（指示）によってもたらさせていることをふまえた上で、その行動が自発的なのか、強制的なのか、客観的に見極めることや、常に自身は選手に圧力を与えてしまう存在であることを自覚した上で、もし強制的に言うことを聞かせていることが分かった時には、自身の行動を戒める意識が必要だといえる。

そして、関根正美（2015）は、指導者が、仮に純粋に「よかれ」と思って指導をしたとしても、それが暴力や体罰に準ずる行為になることもある。純粋であることはよいことばかりではない。指導者の倫理を求めるときに、個人主義的な倫理を要請するだけでは不十分であると思われる。問題は個人主義的な倫理の欠如ではなく、間柄の倫理をどのように実践の場で発揮するかであると論じている¹³。

今、スポーツ界において問われているのは、指導者の倫理観である。指導者は、選手との関係性の中には、常に権力、権威という事柄が介在していることを理解しながら、倫理観を持って接する必要がある。そして、日本スポーツ協会の「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」のひとつにある「指導者は、暴力行為による強制と服従では、優れた競技者や強いチームの育成が図れないことを認識し、暴力行為が指導における必要悪という誤った考えを捨て去る」といった事を肝に銘じ、健全な関係性を構築していく義務があると認識する必要があるといえよう。

5. おわりに

以上、本稿では、スポーツにおけるパワハラ問題の背景にある事柄について、指導者と選手の関係性の視点から事例検討を進めた。その結果、本事案の問題の背景には、チームの統治が指導者を家長とした日本の伝統的な家の概念が

強く根付いている中で、様々な意思決定と伝達が行われていることが通常化していることがある。そして、第三者的にみれば、選手は指導者の権力によって「無理にいうことをきいている」とみえる行動も、自身のキャリア形成や競技実績の向上というプロセスを経ることにより、選手は指導者を権威的な存在だと捉え、絶対的な主従関係が形成されることにより、たとえ理不尽な指示であっても自発的に従う心理が働いていることがみてとれた。

つまり、本事案においても、これまでの先行研究で指摘された事柄が符合していることがいくつか確認できたことは、スポーツ活動におけるパワハラ事案の発生要因を排除することが非常に難しいことを示している。とりわけ、学校スポーツにおいては、選手のキャリア形成への影響という側面もあり、複雑化する。今後は、本稿において指摘した、選手と指導者の関係性における権威的な存在の捉え方に注目し、指導者、選手への調査を実施、検討をさらに進めていきたい。

最後に、2018年10月、選手Aがチームに復帰したとの報道がなされた。チーム自体はリーグ戦に参戦することは叶わなかったが、チームスタッフを新たに整備し、再建に向けてひとつひとつの問題の解決に取り組んでいる。選手Aは復帰の際のコメントで、「アメリカンフットボール競技に復帰する資格はない」と述べた記者会見での自身の言葉との矛盾に対する社会からの批判を覚悟しつつ、チームに戻る決断をしている。

この選手Aの判断に対しては、様々な意見があるだろう。しかし、選手Aが今回の事案を通して、様々な苦難や葛藤を乗り越えた上で、自立的、自主的に判断した行動であると考えれば、尊重すべきものと考えられる。浅野智彦（2015）は、現代の若者のアイデンティティを形成する要因のひとつとして「再帰性」に注目してい

る。この再帰性について浅野は「人や集団あるいは制度などが自らのあり方を振り返り、必要に応じて修正していくこと」と述べ、社会学者のアンソニー・ギデンスが、近代社会の固有の自己のあり方を「再帰的プロジェクトとしての自己」¹⁴と呼んでいることを援用し、自己が静的で固定的なものから、たえず自分自身を吟味し、作り直していく動的で流体的なものに変わったと論じている¹⁵。これらの指摘をふまえると、A大学アメリカンフットボール部の選手Aや他の選手たちが、今回の事案を通して、自らの行動を振り返り、進むべき方向性について自己決定をし、新たなアイデンティティを形成し始めていると捉えることができる。

いずれにしても、今回の事案を機に、A大学アメリカンフットボール部の指導者と選手の関係性が、圧力ではなく信頼関係の中で成り立つことを期待するとともに、スポーツ活動が若者の人格形成に有益な場になるためにも、スポーツ界全体でパワハラ根絶に向けた取り組みを進めていかなければならないことを、再認識する必要がある。

【注と引用文献】

- 厚生労働省「職場のパワーハラスメントの予防・解決に向けた提言」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000025370-att/2r9852000002538h.pdf>：2018年8月21日アクセス
- 文部科学省2014「スポーツ指導における暴力等に関する処分基準ガイドライン（試案）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/020/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2014/03/10/1342651_05.pdf：2018年9月18日アクセス
- 公益財団法人日本スポーツ協会2013「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」
<http://www.japan-sports.or.jp/about/tabid931.html>：2018年9月18日アクセス
- 望月浩一郎 2013「スポーツにおける暴力・セクハラ・パワハラ」の法的諸問題」森川貞夫編『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』かもがわ出版 pp.119-123
- 渡辺雅之 2014「スポーツにおける体罰の根源とは何かと問われて考え続けなければならないこと」『東京学芸大学附属竹早中学校 no.52』p.2
- 野崎武司・植村典昭 1993「日本のスポーツ集団研究の現状と課題」香川大学教育学部研究報告 第I部 pp.1-21
- 阿江美恵子 2000「運動指導者の暴力的行動の影響：社会的影響過程の視点から」『体育学研究 45』p.90
- 日高哲朗 2010「スポーツ指導法の体系化に向けて（9）」『千葉大学教育学部研究紀要第58巻』p.151
- 浜田寿美男 2014「体罰が起こる心理・構造的なメカニズム」『教育と文化 74号』p.61
- 西山哲郎 2014「体罰容認論を支えるものを日本の身体教育文化から考える」『スポーツ社会学研究第22巻第1号』p.58
- なだいなだ 1974「権威と権力—いうことをきかせる原理・きく原理—」岩波文庫 p.62
- エーリヒ・フロム 2013（日高六郎訳）『自由からの逃走』東京創元社 pp.13-14
- 関根正美 2015「暴力容認の風土の解明と、風土を変える視点の検討Ⅰ」『体育学研究60 Report号』p.1
- アンソニー・ギデンスは、この「再帰的プロジェクトとしての自己」について、心的再組織化に関連する近代的社会活動の一般的特徴であると指摘し、日々の活動のなかで生産され再生産される社会的習慣は行為者によって再帰的にモニタリングされ、この意味での再帰的認識はあらゆる人間行為の特徴であるとした。（アンソニー・ギデンス（秋吉美都 安藤太郎 筒井淳也訳）2005『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』ハーベスト社 pp.36-38）
- 浅野智彦 2015「『若者』とは誰か—アイデンティティの30年【増補新版】」河出書房新社 pp.34-36

（はせがわ まこと 神戸松蔭女子学院大学）